

日面仏・月面仏 奥田亡羊

碧巖録に「馬大師不安」という有名な話がある。

馬大師は唐代の禪僧、馬祖道一。大師がいよいよ末期の床に就いたとき、弟子の代表が「ご機嫌いかがですか」と見舞う。これに対し大師はひとこと「日面仏、月面仏」と返す。日面仏は一八〇〇歳、月面仏は一昼一夜の寿命の仏であるという。

師の死に際して、最後の教えを乞わずにはいられない弟子の思いと意識朦朧とするなかで見事に返す師の親切。そのやりとりにはハッとさせられる出会いがある。

難しい禪問答のようなこの言葉の真意はわからない。だが勝手な解釈が許されるとすれば、これは時間のことを言っているのではないかと思う。日面仏、月面仏、そのいずれも同じ存在なのだ。自分の中から「無」が表われて、それを生きるとき、生の目的も意味も時間もなくなる。そこに残るのは人と人、人と世界の出会っただけだ。

小高賢氏が二月十日に亡くなった。ご生前に掛けていただいた言葉が浮かんで消える。振り返れば出会いだけがあつたようなものだ。悲しみはあるが、大きな時間の尺度で捉えれば出会いの喜びと区別できるものではない。それが日面仏、月面仏の意味なのではないだろうか。

佐佐木幸綱のアニミズムや河合隼雄のコスモロジーも通底する

ところは「日面仏、月面仏」と同じである。時間と出会いだけがあつて、その出会いのヴァリエーションが生を照射する。

「うた新聞」四月号の巻頭作品の佐佐木幸綱「うぐいす笛」十五首を読んだ。出会いと時間の諸相をうたう連作である。

・副都心線から東横線になりうすべにいろの夕べのひかり
・先週は雪降る中に咲きて居し白梅よ今日は夕光纏う

・まだ寒い日の朝の酒ひとりなればうぐいす笛を吹く山頭火
・この笛さみしいか、男の笛の、また吹くこの笛おかしいか、あ

あ

・酔いざめの顔がバケツの水にある酔いどれの句を一句憶えぬ
・梅の咲く道帰り来ぬ冷たくてまだ冬がいるシートにねむる

地下鉄副都心線がそのまま乗り入れて地上を走る東横線に変わる。芭蕉のいう不易流行の両面を捉えているようだ。二首目は断続的な変化を通して、時の移ろいを見ている。白梅の出会った世界と自分が出会った白梅と、出会いの関係性の中で生まれるやさしさである。三首目から五首目は山頭火の「其中日記」を読んだの作。時間を異にするものとの出会いをうたっている。「ひとりなれば」は自分にも山頭火にもかかっているのだろう。そこに出会いがある。四首目は「この」という限定と「また」という継続が破調を生み出している。「さみしいか」「おかしいか」と問いつながら「ああ」という喜怒哀楽を超えた感歎に導くところに注目した。五首目は酔いどれの自分と酔いざめの自分、酔い覚めの自分と酔いどれの山頭火、創作とそれを享受する時間、出会いとそれぞれの関係性に詩の核がある。

短歌とは時間と出会いをうたう詩なのだとあらためて思う。